糖尿病とガン――世界糖尿病に寄せて

杉本忠夫
（虎の門病院 内分泌代謝科 非常勤嘱託医）

本号（秋八十六号）が出版される十一月中旬は糖尿病週間が催され、その中日の十四日は二〇一三年の世界糖尿病デーです。今年のシンボルはブルーにライトアップされた大阪城になります。

世界糖尿病デーは、日本をはじめ東南アジアで急速に増加している糖尿病を防ぐための啓蒙活動の一環として、日本各地で色々なイベントが開催されます。この糖尿病デーに賛同して大阪城以外にも、東京タワー・神戸ポートタワーなど国内各地の有名な二十以上のランドマークがブルーの照明に浮かび上がります。

そこで、このように大きな世界的な行事になってきたのは、糖尿病の増加が大きな問題となってきたからです。糖尿病は放置したり経過が長くなってくるとその特有な難しい合併症を発症してきます。

その合併症はよく知られております。それらは、眼底出血により視力障害をきたす糖尿病性網膜症、進行すれば尿毒症となり人工透析療法が必要となる糖尿病性腎症、また下肢のしびれや疼痛をきたす糖尿病性神経障害で

す。これらは昔から糖尿病性三症と呼ばれています。

さいわいにも、これらの合併症は医療技術が進歩し治療できるようになってきております。しかしながら、多大な医療費がかかります。世界糖尿病デーの初期の目的は糖尿病の発症を予防し、この三症の発現を防ぐことにもありました。

そのほか、類い稀な素晴らしい芸能人のエノケンさんや、歌手の村田英雄さんを襲った糖尿病性壊疽があります。エノケンさんや村田英雄さんの名前で一時マスコミを騒がせ、そのため壊疽が国民によく知られるようになりました。このようにやむなく脚の一部を切断せざるを得なくなる壊疽を引き起こすのは、下肢の閉塞性動脈硬化症によるものです。糖尿病はこの閉塞性動脈硬化症の進行を早めることがよく知られております。

また、糖尿病では他の部位の動脈硬化も進行しやすく、そのため狭心症や急死の原因となる急性心筋梗塞、脳動脈硬化による脳梗塞の頻度が一般の人よりあきらかに高いといわれております。

このように色々な重い合併症をきたす糖尿病の増加を世界全体で啓発し、合併症の進行を未然に防ごうという呼びかけをするのが世界糖尿病デーのテーマです。

ところで前述の合併症は重大なことですが、これらの合併症とは別に、大きな問題が持ち上がってきております。

それは糖尿病とガンに関わることです。長年にわたって糖尿病を患っている人では膵臓ガンなどガンを合併する頻度が高いのではないかと以前よりいわれております。

そこで、糖尿病とガンの関連性についてみていきましょう。

約三十年前、ある青年医師が糖尿病の臨床を始めてから十年以上経過した頃、糖尿病には癌の合併が多いのではないかと思い当たるようになりました。

そこで、その医師は少し調査を行ってみることにしました。ある二つのグループについて検討を行ないました。社会の担い手として活躍しておられる六十歳以上で通院中の糖尿病（糖尿病に傍点）のグループと、ある公的機関の六十歳以上の団体職員の二つのグループの死因を比較検討してみました。つまり、その両グループでガンでなくなったメンバーの頻度を調べて比較したのです。

その調査結果をみてみましょう。一般の団体職員のグループに比べて、糖尿病で通院中のグループが約一・七倍もガンで亡くなられたメンバーが多いことがわかりました。

六十歳以下でこのような結果が得られたことは、両グループとも社会的にも、個人的にも重大な損失で、不幸な転帰をとられたことになります。このような不幸はなんとかして避けたいものです。

青年医師はこのデータにより糖尿病の外来診療で、超音波検査などの検査を追加したところ院内の検査能力をオーバーしてしまい苦情が出たそうです。

その後、他の医療機関でも糖尿病のグループでガンで亡くなった頻度は、一般のグループより、一・四から一・七倍高いと同じような報告がなされてきておりました。

最近、日本糖尿病学会においても糖尿病とガンの合併の頻度について検討されました。この報告でも糖尿病グループで膵癌は一・八倍も多いのではないかと報告されております。また、肝臓ガンは約二・二倍多いとされております。

そこで、二〇一三年六月に、日本糖尿病学会と日本癌学会とが合同委員会を立ち上げ、今後、ガンと糖尿病の関連性について共同研究を進めていくことになりました。その活動の成果が期待されます。

また、アメリカではアメリカ糖尿病学会とアメリカ癌学会が日本より一足早く二〇一〇年にこのような企画が始まっています。

これらの日米の研究で成果が上がり、ガンの発症のメカニズムと糖尿病発症の原因が解明され、糖尿病とガンの関係が明らかになることを期待したいと思います。

ところで、この十数年の間に癌関連の医療技術は格段に進歩し、多数の種々の新しい検索技術がめざましく開発、進歩し、臨床に導入されてきております。

たとえば、肺のシリカルCT検査では、従来の単純レントゲン検査では発見できなかった小さな腫瘍陰影も診断できるようになってきました。

また、精密超音波検査や造影MRI検査では膵臓や胆嚢ガンの診断に威力を発揮しております。

PET・CT検査はガンの治療に必要なステージング（ガンの進行段階）に威力を発揮しております。その他にも、内視鏡超音波検査、経口内視鏡カメラ、血管造影法など多数上げられます。

また、検査法の進歩に併行して、ガンの治療法も進歩しております。大腸癌、胃癌、食道癌などは消化器外科の門を叩く前に内視鏡操作で切除や治療ができるようになってきました。

ガンの治療では、前立腺癌の治療をみてみますと、手術、化学療法、放射線療法など治療法が揃っております。どの治療でも、その結果は良好で治療法による遜色がないといわれております。

今から、三十年前に有能な四十九歳の司祭様が前立腺癌で亡くなられました。もし、現在の医療レベルがあったとしたならば、今でも説教され元気に活躍されたかと思われ残念です。

いまや、治療法の開発進歩によってガンの死亡率は抑制されてきております。しかし残念ながら、糖尿病のグループが一般のグループよりガンによる死亡率の高さを解消できておりません。

しかしながら、糖尿病でも一般の人々でも癌は死因のトップであり、その対策は糖尿病あるなしを問わず、まずは定期的な検診を受けて頂くことが重要です。

ガンに対しては先手必勝です。

ポインセチア

中西美子

短日性の花といえば菊やコスモスなどが、頭に浮かびます。気候の温度変化と無関係に日の長さを感じとって花芽をつけたり、色づいたりするのは、地球規模で自然の摂理を感じます。十二月が近付くと赤と緑のクリスマスカラーのポインセチアが町に溢れ出します。ポインセチアは、メキシコ原産の植物で現地では、クリスマスの時期に咲く花なのでイメージが定着したのでしょう。赤く見えているのは小さな花を囲む苞の部分です。たとえ花が枯れ落ちても赤い苞は、永いあいだ鮮やかです。日本でクリスマスに合わせて赤くなったポインセチア手に入れることできるのは、一重に生産者の努力の賜です。前年の鉢物を上手に育てられたとしても、赤くはなりません。赤くするには九月になったら5時から7時まで段ボール箱で覆い暗い時間を長くしてあげなければなりません。今年こそチャレンジしてみようと毎年思うわけです。

故郷

志村有弘（しむら くにひろ）
（文芸評論家）

私は、北海道中央部の深川市に生まれ、高等学校を卒業するまでその地で暮らしていた。先祖は宮城県の白石藩（伊達政宗の家老片倉小十郎が治めていた）に仕えていたが、徳川時代が終わると、我が一族も衰滅し、祖父が北海道の札幌に渡った。

高校生のころまで、とにかく故郷を離れることを考えていた。少年期といってもそれなりに嫌悪するような事態にも遭遇し、一方で自分を唾棄すべき存在として払い捨てたい気持ちがあった。学生時代、夏休みや冬休みに帰省するのが苦痛であった。

自然は美しかった。花咲く季節の五、六月、九月に入ると山全体が見事な紅葉に変わる。しかし、日毎に寒さがつのる晩秋。雪が降り続ける厳寒の冬。厳しいとはいえ、天から降り続ける雪は神々しく、神秘的ですらあった。そうした光景を心の中では十分認識していたのに、そのころはそれを敢えて拒絶しようとしていた。「雪が降るからいいのだ」と言った友人もいたが、表面はその言葉を受け入れようとは思わなかった。

といっても、熾烈な望郷の思いを引きずりながら生きてきたことは確かである。テレビの「北の国から」に映る吹雪や大自然の光景を見て、自然と流れてくる涙はいったい何であるのか、と思う。「ふるさとは遠きにありて思ふもの／そして悲しくうたふもの」と綴った詩人がいたが、それは一面において本当で、離れているから美しく、懐かしく、悲しいものであるのかもしれない。故郷にどっぷりとひたることは息苦しい。

旭川に家があることから、年に何回か出かけ、庭の草むしりや枝切りをしながら過ごす。近くのストアに、私が幼少年時代に食べた菓子が幾つか置かれていることに気づいた。旭豆〈旭川〉、青きなこ〈札幌〉、うぐいす

豆〈旭川〉、ニッキ飴〈旭川〉、金花糖〈旭川〉などである。（〈　〉内の地名は、製造地）

青きなこは、きなこや水飴などで製造したもので、昔はねじれた形の物を食べていた。旭豆は、高校生のころまでは好きな菓子の一つであった。駅などで見る土産用の旭豆は布の袋にアイヌ娘の絵が書かれており、昔ながらのその姿に懐かしさを感じる。金花糖は、水飴と砂糖などから製造するものでニッキとハッカの二種類があり、いずれも少年時代に喜んで食べていた。

私たちは少年のころ、秋なると、山に葡萄やコクワの実を取りに出かけた。「北の国から」で、主人公（黒板五郎）の子どもが小粒の山葡萄を取るシーンがあった。コクワの実は袋に入れ、米櫃の中で米をかけておくとやがて熟する。札幌在住の姉が「露店でこくわの実を売っているのを見た」と懐かしそうに語っていたが、麻生直子（奥尻島出身の詩人）が、コクワの葡萄酒があることを教えてくれた。前掲の旭川のストアに「こくわの実グラッセ」（北斗）なるものがあった。「ラム酒風味」と銘打っているが、食べるとずっと昔に食べたこくわの味がした。

旭川に行くと二週間ほど滞在する。友人に連絡して、親しく言葉を交わすわけでもない。私の生地は深川市である、と冒頭に書いたが、そこは旭川から特急でわずか一駅の距離である。十年ほど前に深川の図書館でおしゃべりをしたとき、旭川から各駅停車の列車で一つ一つ駅や車内から見える風景を確認しながら、深川へ向かったのは、やはり懐旧の念ゆえであったと思う。中学時代、旭川に映画を観に行ったり、バスケットボールの試合でしばしば出かけたことも思い出す。

昔は旭川と深川のあいだに神居古潭という駅があった。この地は多くの文学作品の舞台となっている。駅の前には石狩川が流れ、風光明媚な場所であったが、トンネルが出来たことから、ここは廃駅となった。神居古潭といえば、歌志内生まれの宇佐美好弘の悲しい詩集『神居古潭』（昭和四十五年）を想起する。

そうした懐かしさとは別に、今夏、旭川に二週間ほど滞在していたけれど、層雲峡に齋藤瀏（歌人・軍人）ゆかりの石碑を見に行ったくらいで、誰かと会ったり、深川に出かけることはしなかった。幌加内産の手打ち蕎麦を食べさせる深川駅前の椿そば所（つばきそばどころ）に行きたい気持ちもあったが、とうとう家から出ずじまいであった。

最近、私の望郷の念は生地と直接関係したものでないことを悟った。深川に近い旭川にいることで満ち足りた気持ちになっているらしい。しかしながら、千歳空港や旭川空港に下り立つたびに、ピーンと張り詰めた、澄みきった大気に、「ああ、ここが本当は自分が住むべき場所ではなかったのか」としみじみ思う。そして、近年、北海道文学関係の著述に力を入れているのは、やはり望郷の年が原因なのであろう。

四十年

佐川毅彦

出身地の沖縄県立美術館で個展をやる。

女性の絵を中心に風景画・花など五十一点展示した。女性の絵の前で立ち止まる人が多い。

同窓会名簿から案内状を送ったので、友人・知人がかなり来てくれた。子供の頃のままの顔の人はすぐわかるが、ほとんど四十年以上会った事のない人たちである。顔を見ても名を聞いても思い出せない人もいる。

すまないが、私は彼らについて知っている事は子供の時だけである。大人になった彼らの事など知らない。

道で会ってもわからないと思う。それでも話しているうちになんとなく、どなたか、わかってきた。なつかしく、うれしくなってきた。私は人あたりして、少し酔った気分になった。

小学、中学、高校時代にもどってゆく。

思い出の人たちが途絶えて私はひとり会場にいた。そこへ長い髪の美しい女性が入ってきた。

絵を前に離れたり近づいたりしながら、次の絵と静かに流れるように移動してゆく。かなり熱心に見てくれている。ゆったりした時の移りの中を女性は室内をひと回りしてゆく。

そして最初の絵の前でしばし立ち止まった。それから顔は絵の方へ向けながら髪を指でユラユラさせたり、横にした手で髪をもちあげてひらいた指ですくうようにサラサラと落としてみたり髪を巻いて頭のうしろでアップにして、首すじをさらしたりしている。

たえず髪をもてあそびながら、絵から絵と再びゆっくり移動してゆく。私は中央に置かれた長めの椅子に腰かけ、その女性を、髪を、うなじをいつまでもながめていた。

つきあがった餅米を二本の伸ばし棒で手際よく伸ばしていく山下光信さん。

香川に伝わる郷土菓子

おいり

［香川県三豊市］

生駒親正公が讃岐丸亀藩初代藩主になられたのは天正15年（1585年）。ほどなく、親正公の姫君のお輿入れがきまり、領下郡家郷の人たちがお祝いにと五色の煎りものあられを献上したのが、今も香川県西讃地区に残る「おいり」のはじまり。嫁入りの時、嫁ぎ先に持っていくおいりは「心を丸くまめまめしく」の気持ちのあらわれで、おいりが綺麗だと花嫁さんも綺麗と言われた。愛らしい姿が珍重され、今では、西讃地区以外でも使われるようになった。

山下おいり本舗四代目の山下光信さんは、まるで子どもを育てるように手塩にかけて「おいり」を作る。餅米を一晩水に浸し、蒸して、搗いて、めん棒でのばし、天日に干して角に切る。また天日に干して生地を調整して煎り、味と色をつけ乾燥。美しい色と形をもち、香ばしくて口の中にいれるとふわっととける優しい食感のおいりができるまでには、この12工程1週間の手間と時間がかかる。その一つ一つに山下さんの創意工夫が施され、熟練した職人の技術と勘が冴える。

1 餅米を一晩水に浸し蒸す。天候により水分量や水飴の量を調整しながら餅を搗く。

2 餅に米ぬかをふり、山下さん考案の2本の伸ばし棒で手際よく餅を伸ばしていく。

3 厚さ3ミリ長さ3メートルほどになった餅を網箱に広げ天日に干す。

4 さいの目に切った餅をふるいにかけて形を揃え、さらに天日に干し釜で煎る。

5 丸くふくらんだおいりを攪拌機のなかにいれ、色づけされた砂糖を流し込む。

撹拌機の中で素早くまんべんなく色をつけ一気にざるに広げる。スピードが命。

もともとは婚礼の花嫁土産のひとつだった「おいり」も、時代とともに幅広く使われるようになった。茶会やパーティー、ひな祭りや初節句、料亭や企業からの引き合いも多い。

時代のなかでしなやかに進化する

ほのかに甘く香ばしく7色に輝く山下さんのおいりは、ブライダルキャンディーと海外向けの雑誌にも紹介された。季節や天候を見極めながら、伝統を踏まえ手間暇かけて作るので大量生産はできない。けれど、工夫を重ね、時代のなかでしなやかに進化する。一粒口にいれると、しあわせが広がった。

まるで宝石箱のようだ。

婚礼の引き出物としてかかせない。

現実体験の純化

志村栄守（評論家）

いわゆる就活という難関が、今の若い大きな災害が、次は場所を変えて予想されるとは言え、次から次へと刹那的で、人間らしさを欠く行為がニュースに登場する気がするが、錯覚だろうか。

小林秀雄に、終戦直後の世相に目撃した光景からペンを執ったと思われる『死体写真或は死体について』という、やや異色の短篇がある。当時も、自らの行く末に関心のない、想像力を放棄してしまったような人は、少なからずいたようだ。

「『地獄草紙』の作者も、（中略）死に至る苦しみだけを描いた。作者はよく承知してゐたのである。人間は地獄に行っても生きてゐる事を。死ねば、がすぐ蘇生させてくれる事を」。

なお、『地獄草紙』は、絵巻物。六道思想を背景とする地獄を描いた鎌倉時代の作、と辞書にある。

鎌倉時代の先人に敬意を払い、且つ、小林を信じると、現代人は想像力と無縁な人間に変質しつつあるのだろうか、と妙な疑いの心が沸いても来る。

小林は同著を閉じるにあたって、『伝道之書』から、「生命の日の間、汝その愛する妻と共に喜びて度生せ」等を引用するが、とりわけか刮目すべきはその最後尾だ。（ルビは原文通り）「其は汝は往かんとする陰府には、工作も訃略」も知識も智慧もなければなり。」

だから人間は、生きる日々刻々を、どれほど大切にしても、し過ぎることはない、と言葉の背景が読める。別言すれば、「陰府に往く」その前に、すなわち「生命の日の間」に、本当の「智慧」について考え、また身に付ける努力をしてみたらどうだろう、と言われている思えなくもない。（なお「陰府」は冥土のこと）。

ところがこの時代、社会の表立ったところで、この類の「智慧」が云々されることがまことに少ない。政治・経済・スポーツ・芸能情報に加え、最近は特に異常事件が喧騒の度合いを増している。何かが少し変、と思う人がいても不思議ではない。

街で見かける幼児の姿は可愛い限りだし、また尊くもあるが、成長した彼等の何人かは、理解に苦しむ人間行為に走る。単純に教えることのできる知識や良識とは別に、何か重要なことが隠れるように存在するのではと、思わざるを得ないのだ。

「批評文の作者はいつも、ある命題が心に浮かぶと同時に、その反対命題が心に浮かぶくらい鋭敏でなくてはならぬ。」

小林『手帖』にはこうあるが、心にとどめておくと、これが大きく役立つ機会は訪れる。以下、断片的に拾い上げる文言が、妙な具合に重畳して、ここに秘められた思想に急接近できた、と思える瞬間はある。

まず、小林が『「白痴」について』で、「ドストエフスキイに起こってゐる事」として、こう書いているところをあげる。

「強い精神力が何かのかたちで利用できぬほど絶望的な境遇といふものは在しない、という簡明な事情なのである」。

「簡明な事情」と断定しているが、思想の全貌を同時に明らかにしているわけではないので逆説そのものだ。また、『私の人生観』では、このようにも書いている。

「大切な事は、真理に頼って現実を限定する事ではない。在るがままの現実体験の純化である。（中略）見る事が考へる事と同じになるまで、視力を純化するのが問題なのである。」

ところで私達の生きる日々とは、往々、人との応接が大きな部分を占める。しかもその何人かは、ストレスとしてのしかかってくる。だから一種の諦めで自らをごまかしつつ、生きていることすらある。

ところがこれが、小林の言葉の示唆するところに導かれ、一挙に解決する時が訪れる。「自己を超へた精神との対話が始まらなければ、生きる深い理由には至れない。ソクラテスは、さういふ普遍的な対話劇を、善の或は徳の劇と呼びたかったのである。」

ここは、あの孔子に触れた著作以外では扱ったことのない「徳」という発想を、小林は実は秘かに大切にしていたのだ、とその胸の内を想像させる貴重なところでもある。

そこに注目すると、「利用できぬ境遇は在しない」とか、「現実体験の純化」という奇妙にも見えた文言が、急に生き生きとして来る。

バラバラであったものが、各人の内面で「徳」という発想を意識することによってドラマ性を帯び、展望が開けて来る。

さらに、もう一つの鍵は、「反対命題が心に浮かぶくらい鋭敏でなくてはならぬ」だ。加えて、「現実体験の純化」と小林が書く時のその「現実」は、実は「神」と深く係わること、これに習熟すると、その思想の全像が、意外に身近に感得できて天を仰ぐことになる。

その辺りを言葉にしてみると、物事の成就には、それ以前に伏線として作用するシーンが要る、となる。ところが、これが曲者だ。

いわば「反対命題」であることが多いのだ。

ここに、「心眼」（小林『私の人生観』）の出番がある。常識が否定的と見るそのシーンこそ、実は、思い描くイメージ実現のための、逆転した予兆なのだ、というヒラメキが訪れる瞬間はあるのだ。それは言ってみれば、想像力が一種の「智慧」へと昇華したかと見紛う感喜の時でもある。

丁寧に誠実に淡々と

片岡　義男
（作　家）

彼は二十五歳で結婚した。奥さんはひとつだけ年下だった。結婚してちょうど三十年が経過し、彼は五十五歳になった夏のある日、奥さんは急性の心不全でこの世を去った。彼女の死そのものが、一瞬の出来事だった。その一瞬を境にして、彼女の命は生から死へと切り替わった。

それから三年が経過し、いま彼は五十八歳だ。独身の静かなひとり暮らしで仕事を続けている。いつものように電車に乗るため、彼は自宅から駅へ歩いた。駅前の道の横断歩道は赤信号だった。彼はそこに立って信号が代わるのを待った。横断歩道を越えたところが、駅の改札へと上がっていく階段への入口だった。

階段に向けて歩く人、あるいは階段を降りて来た人など、いろんな人が歩いているのを、道の向こう側から見るともなく見ていた彼は、駅の階段に向けて急ぎ足で歩いている、ひとりの若い女性の姿を目にとめた。彼は驚いた、自分と結婚する前、まだ独身だった頃の、二十代だった奥さんに、その女性はそっくりだった。

道路ごしに思わず声をかけようとした彼は、信号が変わるのを待った。やっとのことで信号は青になり、彼は横断歩道を走って渡り、駅の階段へ向った。見上げるその階段のどこにも、その女性の姿はなかった。彼は階段を駆け上がった。駅の向こう側へ抜ける広い通路でもあるそこには、いろんな人が歩いていた。しかし彼女はそこにいなかった。改札を入ったのか、と彼は思った。上りだろうか、それとも下りだろうか。

迷ったまま彼はその場に立ち止まり、彼女をそれ以上に追いかけることはしなかった。急死して三年になる、三十三年前の独身の頃の妻に生き写しだったその女性を、それからふた月ほどあと、彼はふたたび見かけた。

梅雨明けと同時にやって来た猛暑の日の午後、彼は上り電車をいつもの駅で降りた。最後部の車輛の、いちばんうしろのドアからプラットフォームに出た彼は、ふたつ向こうのドアを電車に入っていく若い女性の姿を見た。独身の頃の、いまは亡き妻とそっくりな、あの女性だ。彼はそのドアへ駆け寄ろうとした。電車は発進した。走り去る電車を彼は呆然と見守った。

三度目に彼女を見たのは、駅へ上がっていく階段の前だった。階段を下りて来た彼は、自分の方に向けて歩いて来る彼女に気づいた。亡き妻の三十年前の生まれ代わりのような、あの女性だ。自分が記憶している独身だった頃の妻に、あまりにも似すぎていくその女性を視界にとらえたまま、彼は立ち止まった。あまりのことに、歩けなかったからだ。

彼女は微笑んでいるではないか。微笑みながら、まっすぐに自分の方へ歩いて来る。若い頃の妻の笑顔そのままだ。妻の名を、彼は呼ぼうとした。そして気づいた。微笑みながらこちらへと歩いて来る彼女の視線は、自分の顔のすぐ脇をとおり抜け、自分よりもうしろにいる人に向けられていることに、彼は気づいた。

彼は振り返った。彼女とおなじような年齢の若い男性が、歩いて来た。そして自分のすぐかたわらで彼女に手をさしのべ、歩いていく向きを変え、彼女とともに駅の階段を上がっていった。彼はまだ歩けなかった。あっけにとられたままその場に立ちつくし、階段を上がっていくふたりを見送った。階段を上がったふたりは、改札口のほうへ姿を消した。その女性を、彼は、それ以来、一度も見かけていない。

という体験を友人たちとの夕食の席で彼は披露した。友人たちはそれぞれに感想を述べあった。

「亡くなったのが奥さんではなくてきみだったら、あとにひとり残された奥さんは、独身の頃のきみに生き写しの男性を、きみの死から三年あとに近所の駅で見かけたりすることは、まったくないと思うね」

という意見は、ひとつの問題をぐるっと反対側から見る視点からのものだった。

「驚くほどよく似た人はいるんだよ、という意見はつまらん意見だよ。僕はいまのきみの話は転生たと思う。死んでからの転生ではなく、生きているうちに転生したんだよ、きみの奥さんは。そして、きみも。独身のころの奥さんにそっくりな女性と、駅の階段を上がっていった若い男性は、どことは言いがたく、きみに似てやしなかったか」

と指摘された彼は、次のように答えた。

「いや、じつは、そのとおりなんだ。あとで思い起こしてみると、その男性は僕によく似ていた。どこがどう似ているのではなく、いわく言いがたく、ぜんたいが似ていた」

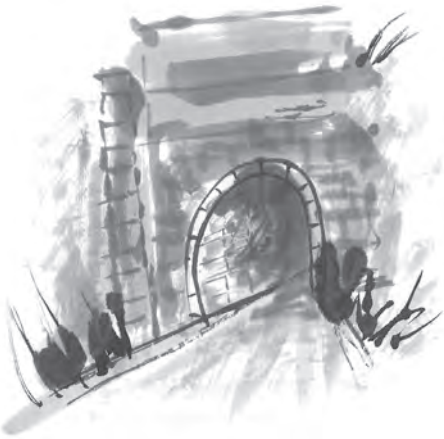
「きみもその男性に転生したんだよ、生きながらにして」

「それならそれでいいんだけど、現実の僕自身は、いまもこうしてここに生きている。その僕は、どうすればいいんだい」

「これまでどおり、きみの持ち味に忠実に、丁寧に誠実に淡々と、日々を送ればいいのさ」

「そのふたりを、きみはいずれまた見るよ。何年かあとに。ふたりは幼い子供の手を引いてたりするよ」

土佐脱藩の道を行く



山西靖彦

国道一九七号線は高知市の高知県庁前交差点を基点に始まって、四国中西部の山間部を横断して、八幡浜を通過し佐多岬の先端近くの三崎港からフェリーで豊後水道を渡って九州の佐賀開港に上陸し大分市を終点とする。

うららかな春の陽光の中、この国道一九七線を高知県須崎市から梼原町に向かって走った。真新しい山岳道路は、車が少なく快適なドライブであった。

「布施が坂」と命名されたトンネルを抜けると、すぐに右折して旧国道に入り、布施が坂の峠に向って折り返した。峠にあるという大町桂月の詩碑を見るためである。

この旧国道の一部は、幕末には、土佐から伊予に抜ける、いわゆる脱藩の道であって、坂本龍馬を始め多くの勤皇の志士たちが通ったという。当時から相当な難所であったが、それは国道

となった後も近年まで続き、国道のナンバーである「一九七」をもじって「行くな酷道」ともいわれていた。かつて梼原村（現梼原町）の小学校への転勤を命ぜられた校長が須崎市からバスで赴任する途中で、あまりの道の悪さに、布施が坂の休憩所でバスを降りて引き返し、辞職をしたことから、俗に「辞職峠」とも呼ばれた布施が坂は、その代表的な難所であった。しかし、今は「布施が坂トンネル」と「羊腸トンネル」とが抜けて瞬時に通り過ぎることができる。

旧国道の峠には、以前は茶店であったと思われる廃屋があって、その前の広場の端に、幅七十センチ、高さ二メートル程の青石に大町桂月の詩が刻まれていた。

羊腸路入鳥聲間　車上身閑心不閑
欲訪勤皇豪傑跡　白雲埋盡幾重山
（羊腸の路に入れば鳥声間なり
車上身は閑かなれど心閑かならず
勤皇の豪傑の跡を訪わんと欲すれど
白雲埋め尽くす幾重の山）

大町桂月は明治二年に高知市に生まれ、「文芸倶楽部」「太陽」「中學世界」などに随筆・紀行・評論・韻文などを書いたが、特に和漢混在の独特な美文の紀行文は多くの読書に読まれた。終生、酒と旅を愛し、日本各地のほか朝鮮や旧満州（中国東北部）まで脚をのばしたが、青森県の十和田湖と奥入瀬渓谷をことのほか愛し、晩年は同地の蔦温泉に居住し、大正十四年に死去している。

布施が坂で詠まれたというこの詩の起句の「間」、承句の「閑」、結句の「山」をそのまま句末に使用した和韻の詩を作ってみた。

和大町桂月先生韻
（大町桂月先生の韻に和す）
往年難處暫時間　信歩心身相與閑
壮士不還仁義盡　赤心惟在故郷山
（往年の難処暫時の間　歩に信せて
心身相与に閑なり
壮士還らずとも仁義は尽くす
赤心惟在り故郷の山）

土佐藩を脱藩してこの峠を越えた志士は多かったが、志を遂げて再び故郷に帰って来た者は少なかった。志半ばで斃れた志士たちの故郷への思いはいかばかりであったろうか。

明治になって、土佐が薩摩や長州ほど奮わなかったのは、維新の動乱においてあまりにも多くの人材、しかも坂本龍馬や中岡慎太郎のほか、土佐勤皇党盟主の武市瑞山や天誅組総裁の吉村寅太郎といった第一流の人材を多数失ったからだといわれている。峠からは、今走ってきたばかりの山岳道路が足元に白く輝いて見え、その上には地元の特産品であるという茶の畑が、幾重にも重なって遠く青空に接していた。

旅のスケッチ

夏の家のコテイジ

さかもと　ふ　さ
（型絵染版画家、エディター
イラストレーター）

五月から六月にかけて再びウィーンへいった。今年で十年目になる、第二の故郷になりつつある。

家主のお姉さんの夏の家のコテイジに遊びにいった。昨年、美しいコテイジという賞をもらったそうだ。ここはウィーン郊外にあるガルテンといって市民農園だ。三百㎡くらいの庭に小さな家を建て、土、日の休みや休暇をここで過ごす。お茶をして庭の手入れ等をして楽しむのだ。コテイジは三間四方くらいの小さな二階建てに、食物を保存する地下室がある。二階のベランダの手すりには赤いゼラニュウムの花がいっぱいに咲き乱れ、軒先の中央に蚊よけの植物がつり下げられていた。手入れの行き届いた庭には大きなヒマラヤ杉、サクランボ、桃、プラム、リンゴの木があり、季節の果物を楽しみ、ジャムを作って保存をしている。その他にも白雪姫の小人達、小さい池にはカメ、白ウサギに赤い電話ボックス、その中でシャワーを浴びられるようになっていた、メルヘンの世界だ。

オーストリアには時間が止まったようなゆっくりとした暮らしがある。